

〈和歌の課題〉

憂きことの 稀にしあれば 苦しきを 常と思へば 樂しかりけり

(口語大意)

つらいことが稀にこそあれば苦しいことよ。常にあることだと思えば楽しいものだ。

〈漢詩の課題〉

五言律詩

示外甥政直

外甥政直に示す

一貫唯唯諾
從來鐵石肝
貧居傑士
勲業顯多難
耐雪梅花麗
經霜楓葉丹
如能識天意
豈敢自謀安

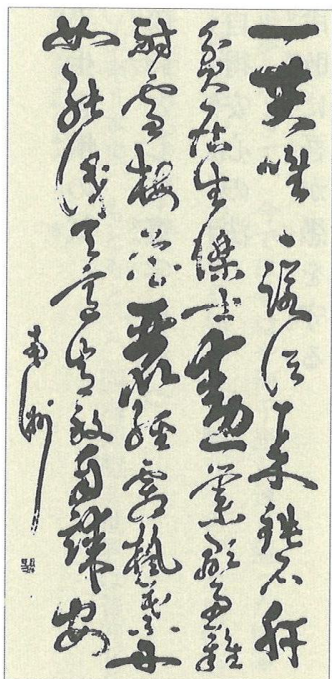
一貫唯々の諾
從來鐵石の肝
貧居傑士を生じ
勲業多難に踴わる
雪に耐えて梅花麗しく
霜を経て楓葉丹し
如し能く天意を識らば
豈敢えて自から安きを謀らむや

(口語訳) 一旦心に許したことはどこまでも貫き通し、これまでの鉄や石のように堅い精神を持ちつづけよ。貧乏な家にすぐれた人物が生まれ、手柄は多くの苦難を経た後、世にあらわれる。梅の花は雪のきびしさに耐えぬいて美しく、かえでの葉は霜のきびしさにふれた後、真赤にもみじする。もし、そのように自然の理を理解できたら、どうして強いて自分で安楽になろうとすることがあろうか。そんなことはしなくてよい。

○外甥政直Ⅱ妹コトの三男市来勘六。明治五年アメリカに留学した。その折与えた書。明治十年客死。○耐雪梅花麗Ⅱこの五言一行を書として別に書いている。

〔五言四行ものを五言絶句と

いい、八行ものを五言律詩という。右の詩の偶数句の末語を並べると、「肝・難・丹・安」となり、同韻である。五言は上二句と下三句に分けて読める。〕



(画)(青)(庄)(薩)

七言律詩

失題

失題

柴門曲臂絕逢迎
夢幻利名何足爭
貧極良妻未言醜
時來牲犢應遭烹
願遁山野畏天意
飽易榮枯知世情
世念已消諸念息
烟霞泉石滿襟清

柴門臂を曲げて逢迎を絶つ
夢幻の利名何ぞ争うに足らむ
貧極まつて良妻未だ醜を言わず
時来たらば牲犢応に遭うべし
願わくは山野に遁れて天意を畏れ
飽くまで榮枯を易えて世情を知らむ
世念已に消えて諸念息み
烟霞泉石襟に満ちて清し

（口語訳）粗末な狭い家にひじを曲げて寝起きし、客を迎えて応対する煩わしいこともさっぱりなくなった。夢まぼろしのようなはかない名譽利益など何で争い求める価値があるう。全くとるに足らないことだ。貧乏のどん底にあっても、順良な妻はまだ一度も貧乏が醜い、恥ずかしいと愚痴をこぼしたことはない。官に仕えて羽ぶりをきかしていても、いつか時が来ると犠牲の小牛同様煮られてしまうような目にきつとあうこともあるうから、願うことならどうか山野に身をのがれてかくれ住み、天意を畏れかしこみ、行いを慎み、榮枯盛衰それぞれの立場をかせ、よくよく十分に世の姿を知り尽くしたいものだ。そうすれば、名譽利欲を望むような世俗の心はもはや消えて、色々の邪悪な思いもなくなり、かすみや泉水庭石など自然の風物が思いのすべてを占めて、清々しい気分になるものである。

○柴門Ⅱ柴の戸。粗末な家をいう。○逢迎Ⅱ人の応対。○良妻Ⅱよい妻。順良な妻。○牲犢Ⅱ犠牲の小牛。○烟霞泉石Ⅱ文字どおり解してよいが、自然のこと。

七言絶句

感懷

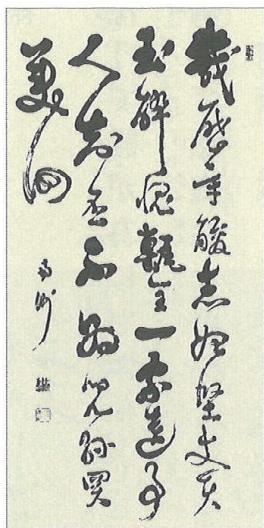
感懷 「心に感じたこと」

幾歴辛酸志始堅
丈夫玉碎愧甄全
一家遺事人知否
不爲兒孫買美田

幾たびか辛酸を歴て志 始めて堅し
丈夫は玉碎して甄全を愧ず
一家の遺事人知るや否や
児孫の為に美田を買わず

（口語訳）幾度もつらい目にあつてこそ人の志はやつと堅固になるのである。男子たる者は潔く玉と砕けても、瓦のようにいたずらに命を全うするのを心にはじなければならぬ。私の家の子孫に残すことを人は知っているだろうか。それは子孫の爲を思つて敢えてよい田を買い残さないということである。

〔明治四年作。西郷は宣言し実行した。〕



（画）（青）（庄）（薩）